

第5章

授業に関する技術の 指導・授業の評価

授業づくりは、教育実習の中心となるものです。授業に関する指導技術は、授業を積み重ね、経験を積む中で向上していくものですが、実施した授業を適切に評価し、教育実習期間中には、授業づくりの基本をしっかり身に付けさせたいところです。

1 授業に関する技術の指導

効果的な授業形態

【授業形態を選択するポイント】

- 1 学習活動の内容に応じて、効果的な授業形態を選択しているか。
- 2 授業の中で、児童生徒の動き（活動）があるかどうか。

学習効果を高めるためには、児童生徒の能力・適性、興味・関心等の実態に応じ、問題解決型の各段階において、一斉学習やグループ学習、ペア学習、個別学習を適切に取り入れるなど、それぞれの学習活動に合った学習形態を組み合わせることが大切です。

教育実習期間で行える授業数は限られていますが、授業見学を通して多様な授業形態を経験させることも大切です。

○効果 ●留意点

一斉学習

○話し合い活動など、集団で思考する場面で活用できる学習形態。多様な考え方を交流させることで、思考が深まる。

●教員主導になりがち。児童生徒が主体的に活動するような工夫が必要。

グループ学習

○児童生徒をいくつかの小集団に分けて指導する学習形態。学習者の興味・関心や習熟度に対応することが可能。少人数なので、話しやすい雰囲気が生まれる。

●グループの一部の児童生徒だけで学習が進むことがないように配慮が必要。

ペア学習

○考えを交流したり、互いの学習状況を確認めたりできる学習形態。適宜、ペアを変えていくことで、意見の交流や学習の深まりが期待できる。

●交流する相手が少ないと固定的な考え方に陥る場合がある。

個別学習

○個別の課題や個人のペースで考えたり、活動したりする授業形態。一人ひとりの能力や適性、習熟度に対応することができる。

●教員一人で支援しきれない場合もある。T Tを取り入れる等の工夫が必要。

児童生徒への指示の在り方、発問と指名の指導

【指示・発問のポイント】

- 1 児童生徒が何をすればよいのか分かるよう、簡潔で的確に指示しているか。
- 2 導入の発問、展開の発問、終末の発問を使い分けているか。
- 3 発言している児童生徒の顔を見て、しっかりと聞いているか。

児童生徒の興味・関心・意欲を引き出したり、思考を深めたりする上で、指導者の指示や発問は重要です。このため、学習指導案の中で、指示や発問の計画を立て、予想される児童生徒の反応についても検討しておく必要があります。また、指示や発問は、指名した児童生徒だけでなく、学習している児童生徒全員に投げかけることが重要です。

視点1 指示は、簡潔で的確に行う

一度にたくさんの指示を出すと児童生徒が迷ってしまう。児童生徒の動きを確認しながら、次の指示を出すようにする。

視点2 いくつかの発問を使い分ける

○導入の発問：児童生徒の興味・関心・意欲を引き出す問い。既習の知識・技能の確認。

○展開の発問：児童生徒の思考を深める問い。解決方法の発見を誘うような問い。

○終末の発問：内容を振り返って考えさせる問い。新たな課題が発見できるような問い。

視点3 児童生徒の発言を大切に

指名した児童生徒の発言をしっかりと聞き、「よく考えているね」「よく気付いたね」などの言葉を返すようにする。また、発言の内容を教室全体に投げかけ、それに対する意見を求めるようにすると児童生徒の思考が深まっていく。

板書の方法の指導

【板書のポイント】

- 1 学習内容を反映したものになっているかどうか。
- 2 授業の内容が分かりやすくまとめられ、理解を助けるものとなっているか。
- 3 児童生徒の発言を板書に生かしているかどうか。

教育実習においては、その時間の授業目標や内容を考慮した板書計画を事前に立案するよう指導する必要があります。

基本的に、板書は、授業1時間あたり黒板1面分が適当ですが、教科の特性や児童生徒の発達段階に応じて使用する言葉や量も変わってきます。板書は、児童生徒が授業内容を理解する助けとなるものであると同時に、ノートに写し取った板書をもとに、作業したり、振り返ったり、考えを深めたりできるようなものであることが理想です。

視点1 板書計画を立てる際の留意点

- ①語彙と表現
児童生徒の発達段階に応じた語彙や表現を用いること。義務教育段階では、学年別漢字配当表に留意する。
- ②チョークの色
重要度に応じてチョークの色を使い分ける。ただし、誰もが見やすい配色に考慮すること。
- ③記号等の整理
矢印や文字囲みなどは、論理的な規則性をもって用いること。

視点2 技術的な留意点

- ①文字
丁寧に正しく書くこと。特に義務教育段階では、漢字の筆順にも留意する。
- ②文字の配置
横書きの際は、3段組程度に分けて板書する。
- ③立ち位置と姿勢
板書しながら説明するのは避ける（説明は児童生徒の顔を見ながら行う）。板書後は、児童生徒が板書を見やすいよう立ち位置に配慮する。

効果的なプリントの作成についての指導

【プリント作成のポイント】

- 1 教科書に対応したプリント教材やワークシートになっているか。
- 2 各教科のねらいに即した内容になっているか。
- 3 学習効果を高めるため、児童生徒の実態や学習内容を考慮したものになっているか。

主となる教材は教科書であり、プリント教材は、その補助的なものです。児童生徒の実態と学習内容を踏まえ、授業を構想する中で、どのようなプリント教材を活用することが効果的であるかを十分吟味する必要があります。ねらいに即して効果的にプリント教材を選択・活用することで、学習効果を高めることができます。

視点1 ねらいに即したプリント教材

- ①知識・技能の定着
ドリル的プリント教材により、学習内容の定着を図る。
- ②思考の活性化
図、フローチャート等を用いて、考える手がかりを与えたり、考えをもたせたりする。
- ③思考の整理
図、表、グラフ等により思考を整理したり、発表したりする際の資料として活用させる。
- ④学びの振り返り
配布したプリントをファイリングさせることで学習内容を蓄積し、学び直しを可能にする。

視点2 作成上の留意点

- ①内容の精選・吟味
・児童生徒の実態と学習内容に合わせたプリントを作成する。
・内容を盛り込みすぎると、伝えたいこと、学ばせたいことが曖昧になる。
- ②内容構成の工夫
「穴埋めプリント」ばかりでなく、自分の考えを記入し、思考過程が明確になるように内容を工夫する。
- ③自己評価欄の設定
本時の授業を振り返ったり、学習したことを確認させたりするために、自己評価や感想を書かせ、授業評価をさせる。

机間指導の方法の指導

授業中、児童生徒の理解の状況を把握し、その理解の状況に応じて個別の支援をしたり、次の展開に生かすなど、机間指導は授業において不可欠な教育活動です。

教育実習で実施する授業において、机間指導を行える場面を適宜設定し、その目的や方法についても指導しましょう。



【机間指導のポイント】

- 1 順番を考える
ランダムにまわるのでは効率が悪くなるので、限られた時間内でどのようにまわるのかを、あらかじめ計画しておく。
- 2 声の大きさを考える
個別指導は小さな声で行うのが基本であるが、他の児童生徒のヒントになったりその児童生徒の良さを広めたりしたい場合は、学級全体に聞こえる声で言うことも必要。

視点1 学習内容の個別支援をする

適切な個別支援を行うために、児童生徒に寄り添って様子を観察することは重要である。学習課題に対して、「どこでつまづいているのか」「どこまで理解できているのか」などをつかんで、個別に支援するのである。そのためには、一人ひとりの実態把握が日常からなされていなければならない。つまづいている児童生徒ばかりではなく、理解が早い児童生徒やグループに対しても状況に応じた支援が必要である。

視点2 学習課題に対する児童生徒の考えや活動を把握して次の展開に生かす

学習課題に対して、一人ひとりの児童生徒やグループがどのような考えをもっているのか、どのような活動しているのか等を把握して、次の学習活動や展開につなげることが大切である。周りの手本となる考えや活動を紹介したり、相反する意見の児童生徒の考えを意図的に取り上げたりすることも考えられる。これにより日頃は発言の少ない児童生徒の意見を取り上げることもつながり、授業に積極的に参加させることが可能になる。

視点3 児童生徒を励ます

一斉授業では、児童生徒たちと個別に話す時間は限られている。机間指導の中で一人ひとりへの肯定的な声かけをすることによって、児童生徒たちのやる気を育てる授業になる。

ノート指導の方法の指導

児童生徒は、ノートを取ることで、教員の発問や指示への応答をすることで授業に参加します。

ノートを取るという活動の目的には「本時の内容を正確に記録すること」「本時のポイントを明確にすること」「自分の思考過程を記録すること」等があり、授業後の自学自習において活用できるノート作りを指導する必要があります。

【ノート指導のポイント】

- 1 児童生徒にとってノートを取ることは、授業における大切な活動である。
- 2 ノート作りのためのノート指導ではなく、思考力・表現力の育成につながるノート作りの指導が重要である。

視点1 作業のためのノート

漢字・英単語・計算の練習、作品制作（作文・絵）のための下書きなど、児童生徒が各自で作業するためのものであり、個々の取組の質・量をみることができる。熱心な作業の跡がみられたら、その努力をほめ、児童生徒のさらなる意欲向上につなげる必要がある。

視点2 授業の内容を記録・再構成するためのノート

授業後に読み直して学習の成果を確認するだけでなく、そのとき学習していることを整理することができる。板書を丸写しするだけでなく、授業中での教員や友人の発言で重要だと判断した内容を文字化して記録したり、自分なりの考えをまとめたりできるように指導する必要がある。項目分け、色分け、レイアウト、下線、矢印、吹き出し等各自で工夫して自学自習に活用できるノートとなるように指導する必要がある。

視点3 評価、コミュニケーションの内容を記録・再構成するためのノート

定期的にノートを提出させ、その内容を点検し、コメントを書いて返却することで、児童生徒の「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「知識・理解」「技能」の4観点を評価することが可能になると共に、児童生徒との双方向的なコミュニケーションの手段としても活用できる。

効果的な情報機器や教具の活用についての指導

【情報機器や教具活用のポイント】

- 1 児童生徒の興味・関心を喚起し、授業に引きつける。
- 2 児童生徒の理解を助ける。
- 3 児童生徒の表現力の育成につなげる。



教科書と板書のための授業に、情報機器（ICT）や教具を効果的に取り入れることで、「児童生徒がわかる授業」を行うことができます。「わかる授業」は「学力向上」につながることから、授業計画を立てる際に考慮すべき重要な視点です。

視点1 どのようなICTや教具を使用するのか ～「何を見せる」「何に触れさせる」「何を感じさせる」～

情報技術の進展により、コンピュータ（インターネットも含む）、プロジェクター、デジタルカメラ、電子黒板、タブレット型端末等のICTが教育の現場で使用できる環境が整ってきている。ICTを活用し、日常では見ることができない「小さいもの」「遠いところ」「現象」等を実際に見せる。また、本物、標本、模型に触れさせるなど、児童生徒の実感（驚き・感動）を伴った体験的な活動を授業に取り入れ、児童生徒の興味・関心を喚起し、理解を助ける必要がある。

視点2 どのような場面やタイミングで使用するのか

- 指導のねらいに沿って、単元や題材のどの場面で使用するのかを検討する必要がある。その際、教員が使用するのか、児童生徒が使用するのかを明確にしておく必要がある。
- 授業の導入や展開、まとめの場面によってICTや教具の使用意図が異なるので、提示する内容とその見せ方も十分検討する必要がある。

視点3 どのような意図で使用するのか（どのような効果を期待するのか）

- ①児童生徒の興味・関心を高める
- ②児童生徒一人ひとりに課題を明確につかませる
- ③わかりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めさせる
- ④児童生徒の知識の定着を図る
- ⑤児童生徒に情報を収集させたり選択させたりする
- ⑥児童生徒に調べたことをまとめて発表させ、表現力を育成する

2 各校種・各教科の指導上のポイント

一言で“授業”といっても、校種や教科のねらいや特色に応じて指導上のポイントも異なってきます。本県では、「新学習指導要領実施上の手引き」に各校種・教科の授業実施上のポイントや留意点を示していますので、実習生への指導に際しては、これを参照してください。

□ 小学校、中学校ともに「第2章 各教科、領域の改訂・授業改善のポイント及び展開例」において、要点を整理しています。

例)

小学校 国語 1「目標」 (P15)

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

ここがポイント！

- (1) 人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする「伝え合う力」を高めること
- (2) 論理的な思考力や想像力及び言語感覚を養うとともに、我が国の言語文化に親しんだり、国語の特質を理解したりしながら、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てること

例)

中学校 理科 4「新学習指導要領の趣旨や内容に対応した授業改善」(P34)

(1) 理科の授業における「言語活動」の充実

<学習の流れ(例)>

○問題を見だし仮説(予想)を立て、観察、実験を計画する。

○結果を整理する。(記録やデータを表、グラフ化し、分析、解釈する)

○予想や仮説に照らし合わせて検討、他のグループの結果と比較する。
○科学的な用語や概念などを使用して考察したり、話し合ったりする。

○科学的な思考力、表現力の育成

ここがポイント！

- * 観察、実験の目的を明確にもたせ、予想される結果を考えるなど探究的に取り組ませる。また、得られた結果を適切に記録することができるよう指導する。
- * 結果の整理の際、児童生徒に十分考察させるために、記録やデータを処理したり、グラフ化したりする過程を大切に指導する。

□ 高等学校では、「第2章 教育課程の編成及び実施に当たって」の各教科の改定及び授業改善のポイントにおいて、要点を整理しています。

例)

地理歴史 「5 新学習指導要領の趣旨や内容に対応した授業」(P23)

授業実施に当たっての留意点

- (1) 「地理歴史は暗記教科」というイメージを取り除き、作業的・体験的活動を組み込む。
- (2) 地理的技能や歴史学習にかかわる技能を高めるため、多様な資料を活用する。
- (3) 討論や発表の機会を設けるなど、言語活動の充実を図る。

3 授業の評価

現在、各学校で行われている授業評価は、児童生徒にとって、より「魅力的な授業」「わかる授業」の実現に向けた授業改善を目的として行われています。教育実習においても、実習生が教員として必要不可欠な授業に関する力を身に付けるため、実施した授業を適切に評価する必要があります。

また、こうした授業改善のための評価に加え、教育実習における授業の評価は、大学へ提出する実習生の評価の根拠となる評価という二面性があります。

授業改善に向けたPDCAに基づく授業の評価

教師には、授業を構想し、授業を設計し、実践し、実践を評価し、改善を加えながら更に次の授業づくりに取り組んでいく確かな指導力が求められます。この一連の指導力、すなわち授業力は、PDCAサイクルの中で「授業構成力」(P)、「授業実践力」(D)、「授業分析力」(C)、「授業改善力」(A)ととらえることもできます。

教育実習においては、「授業実践力」(D)を中心として評価が行いがちですが、「授業構成力」(P)、「授業分析力」(C)、「授業改善力」(A)についても、次の視点から評価し、授業改善に向けて継続的に取り組む姿勢を身に付けさせることも重要です。

□ 「授業構成力」(P)

学習指導案及びその作成過程によって評価します。

実習生が教材の価値をどのようにとらえ、どこに焦点をあて、何をねらいにしながらその授業をつくろうとしたのか、指導の過程において、実習生が指導担当教員に直接自分の考えを語ることで自分が何をめざしているのかがはっきりと見えてくるものです。それらをそのまま評価するのではなく、指導助言した結果、さらに教材に対する価値や意義を見い出すことができたかや、どのようにそれを活かそうとしたのかを評価します。

□ 「授業実践力」(D)

授業実践を通して評価します。

授業では、資料の提示や発問・指示の仕方によって、児童生徒が様々な反応を示します。発問・指示の仕方や児童生徒の反応をどのように扱い、授業の展開に生かしたのかを評価します。例えば、児童生徒の発言を背中で聞きながら同時に板書したりすることは、児童生徒の考えをしっかりと受け止めていることにはならないでしょう。児童生徒の表情をしっかりと観察しながら発言の内容を注意深く聞き、価値付けをすれば、児童生徒は自分の言葉を大切にしてもらったという印象をもつことになります。このやりとりを丁寧に行えているかどうかの評価の大きなポイントとなります。

□ 「授業分析力」(C)「授業改善力」(A)

授業実施後の指導担当教員との反省会や授業研究会での実習生の発言や実習生が日録に記載した内容等により評価します。

実習生が児童生徒の反応や、指導担当教員及び他の教員の指導助言等を真摯に受け止め、いかに客観的に自己評価し、分析しているか、また、それらの分析を踏まえて、「どの点を、どのようにして」改善しようとしているかが明確になっているかどうかです。できなくてもそれをやろうとしているかどうか、今後の成長の鍵となります。

教材や授業技術のことなど、実習生に教えるべき内容は数え切れないほどありますが、私たちが評価すべきなのは、「教員としての資質」です。実習生が自己と向き合い、仲間とつながりを持ちながら、自身の「教員としての資質」を高めていくプロセスを、指導担当教員としてしっかりと見つめていくことが、信頼性のある評価につながります。

査定授業の実施と授業の評価

査定授業は、教育実習期間中に学んだ成果を発揮する場であるだけでなく、大学等の教職科目などで取り組んできたこと全ての集大成です。

また、指導担当教員にとっても、実習生とこれまでの実習期間中に積み上げてきた授業づくりの成果を発揮する場でもあることから、次に示す「査定授業の目的」を踏まえながら、高い意識で臨む必要があります。

[査定授業の目的]

- ① 教育実習、特に授業実習の成果を自己確認する。
- ② 指導担当教員だけでなく、管理職をはじめ、様々な教員の意見を聞き、多様な視点から自分の授業を振り返る。
- ③ 授業の準備・計画と実践・反省の関係を実際の授業を通して学ぶ。
- ④ 教育実習の「評価」にあたっての重要な判断場面・判断基準となる。

このうち、最も重要なのが、④に示すように、査定授業が「教育実習の「評価」にあたっての重要な判断場面・判断基準となる。」ということです。

このため、査定授業の評価は、客観性が求められ、評価の最終決定者である管理職はもとより、より多くの関係者の授業参観をお願いすることが必要です。

査定授業実施に際しての留意事項

1 実施日時、準備日程の打ち合わせと決定

個別の実習プログラムを作成する際に、指導担当教員は、教育実習担当教員と連携して、査定授業及び授業後の授業研究会の日時を決定します。

実施日時が決定したら、教育実習担当教員は、査定授業及び授業研究会に管理職やより多くの関係の教員が参加できるよう、時間割変更などの調整を教務部の時間割変更担当に連絡し、授業等の調整を行います。

指導担当教員は、査定授業を意識して、実習期間中の実地授業のプログラムを作成します。中学校や高校では、査定授業を実施するクラスの単元の流れを確認したり、

他のクラスにおいて査定授業と同じ内容の授業を実施するよう実地授業を計画することにより、査定授業がより完成度の高いものになります。

2 学習指導案の作成

査定授業は、特別な授業として、他の実地授業と比べて、特に周到に準備をする必要があります。指導担当教員は、実習生に余裕をもって指導案を作成させ、適切な指導助言や可能であれば査定授業で実施する授業の学習指導案により、他のクラスでの授業実践を積み重ねて学習指導案を適宜修正し、査定授業に臨ませます。

また、査定授業に必要な教材・教具についても早めに準備します。

3 査定授業の事前準備

□ 関係資料の事前配布

査定授業の学習指導案や次に示す資料を前日までに、当該実習校のすべての教員に配付します。

- ▽ 学習指導案
- ▽ 授業で使用する教科書の該当ページや資料
- ▽ 授業評価表 など

学習指導案等を事前に配付し、事前に一読してもらうことにより、参観者が視点を明確にして査定授業に臨むことができ、実際には査定授業を参観できない教員から指導助言を受けることも可能となります。

また、他の授業を参観することは、教員の資質能力の向上にもつながるものです。特に、実習生の授業を教員が参観することは、自らの授業を振り返る絶好の機会ともなります。このため、教科や学年等の教員だけでなく、すべての教員に配付するようにします。

なお、時間割変更等により出席する関係の教員には直接手渡し、参観の案内については実習生自身の言葉で伝えるようにします。

□ 査定授業及び授業研究会の参観への案内

査定授業及び授業研究会の当日、職員朝礼などの場において、教育実習担当教員または、実習生自身から参観・出席について案内をします。

その際に、教科や学年等の教員だけでなく、空き時間があれば積極的に参観・出席いただくようお願いします。

□ 査定授業の会場づくり

参観する教員の椅子を準備したり、必要に応じて授業のようすを記録するためのカメラやビデオ撮影の準備等をします。

実習生が複数いる場合は、実習生で協力して準備させます。当該授業を行う児童生徒に協力させて準備することにより、当該クラスの児童生徒の査定授業に向けた姿勢やモチベーションを醸成することも期待できます。

なお、次の2点に留意させましょう。

① 実習生同士の参観には、椅子は使用しない

同じ学ぶ立場にある実習生同士の参観には椅子は使用しません。互いに学ぶ姿勢を大切にしたいものです。

② 写真やビデオの撮影は、許可を得た上で行う

授業の中身や児童生徒の反応の様子を撮影し、授業研究会に生かすことは非常に有効ですが、児童生徒が写りますので、目的と活用範囲を明確にして、実習生だけの判断ではなく、指導担当教員の許可を得た上で行わせます。

4 査定授業実施後の留意事項

査定授業が終わったら、参観した教員に謝意を伝えるよう指示します。

また、授業終了後は、記憶が新しいうちに、自分なりの反省点をメモさせ、授業研究会に向けて、ポイントをまとめておくよう指示します。

以上の留意事項については、教育実習担当教員が予めまとめ、実習生自身がチェックできるようにしておくことにより、効率化と指導担当教員の業務軽減につながります。



参考資料：査定授業実施チェックリスト<P99>

授業研究会の実施と授業の評価

査定授業終了後の授業研究会は、前述したとおり、大学へ提出する実習生の評価の根拠となるものであるとともに、多くの教員が参加することにより、実習生にとって多くの指導技術等を獲得できる有意義な場となる重要なものです。

このため、授業研究会の実施に際しては、教育実習担当教員が企画運営・進行することとして、特に、次の点に留意する必要があります。

[授業研究会実施に際しての留意点]

- 校長、教頭、指導担当教員、教科（学年）関係教員、授業実施実習生、他の実習生等ができるだけ出席できる日時等を検討して組むこと
- 効果的・効率的な研究会となるよう簡単な流れを表すレジュメを作成しておくこと
- 授業者（教育実習生）がしっかりと自己評価を行えるよう、指導担当教員を通して指導しておくこと
- 的をしぼった議論や指導助言ができるような会を進行すること
- 必要に応じて、授業を実施した実習生とは別に記録者を設定しておくこと

また、授業研究会の進行については、授業研究会の出席メンバーや人数により様々な方法が考えられますが、単に授業の感想や思いつきの意見、さらには、抽象的な発言に終始しては、効果が上がりません。限られた時間の中で、充実した協議となるよう、授業研究会を進行する教育実習担当教員は、事前の準備をしっかりと整えておく必要があります。

授業研究会の展開例を右に示しています。参観者が順番に授業の感想を述べる従来型の展開方法（a）のほか、構成メンバーによっては、視点を定めて協議を行う方法（b）も効果的であり、また、近年、多くの学校で実施しているワークショップ型の授業研究（c）も有効な方法の一つといえます。

【授業研究会の展開例】

① 進め方を説明する（進行役：教育実習担当教員）		
・実習生の紹介、授業研究会の流れ、時間配分を説明する。		
② 授業者（実習生）が授業の自評を行う		
<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導案に基づいて、本時の目標（ねらい）や児童生徒の実態や教材の特色に関わり、本時の目標（ねらい）をどのように立てて、どのように構想したか。 ・授業を実施してみて、上記のことがどうだったのか。（自分なりの成果と課題のとらえ） ・特に意見や助言をもらいたい点など。 		
③ 協議		
<従来型> a	<視点を定めて協議> b	<ワークショップ型> c
□ 授業参観者からの評価・気付き ※全員が意見を言えるよう発言の順番を次の通り配慮 ・他教科の教員が参加している場合は他教科の教員から、関係教科の教員へ ・若手教員からベテラン教員へ	□ 授業の準備・計画について 学習指導案の仕上がり／教材教具の準備／学習目標の明確化 □ 授業の進め方 計画の実現度／導入・整理の適切さ／ □ 技術・態度 指示・発問／板書／声量／落ち着き □ 児童生徒の反応 学習への参加・集中／理解度／指示・発問への対応／教室の雰囲気	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの上に付箋紙を貼り出す ・付箋紙の内容によりグループ化し小見出しを付ける。 ・グループ化したもの同士の関係を議論し、線や文章で表す。 ・成果と課題、改善について方向性を見出す。 ・グループで発表する。
④ 指導担当教員からの評価・気付き、まとめ		
<ul style="list-style-type: none"> ・参加者からの意見を踏まえ、指導担当教員から授業のねらい等についての補足や気付き ・実習生の実習期間中の成長の様子 		
⑤ 管理職からの総評		
・これまでの意見を踏まえ、全体を通した総評と実習生への激励		
⑥ 授業者（実習生）による今後の取組に向けた取組・謝辞		
・授業研究会の意見や実習全体を通して、今後に生かしていきたいこと及び謝辞		



参考資料：授業研究会実施チェックリスト<P99>

授業評価表の作成・活用

授業評価表を予め作成して活用することにより、実地授業及びその振り返りや査定授業及び授業研究会等がより充実したものとなります。

授業評価表の作成・活用の意義・効果は次のとおりです。

- 授業全体をバランスよく評価でき、問題点が明らかになりやすい。
- 評価の視点を明確にした上で、参観することにより、的を絞った助言を行うことが可能となる。
- 授業を参観した者も評価することを通して、自らの授業を振り返ることとなる。
- 規準を設けて授業を評価することにより客観的な評価となる。
- 授業研究会に出席できない授業参観者の意見を授業者（実習生）に明確に伝えることができる。 など

授業評価表の具体的な内容は、概ね次のような内容を基本としながら、校種の特徴を踏まえて作成する必要があります。

授業の準備	<input type="checkbox"/> 本時の目標は、 <u>学習指導要領に則り</u> 、単元構成や児童生徒の実状に照らし適切である。(下線部は教科関係者のみ) <input type="checkbox"/> 学習のねらいを明確にした上で教材解釈や教材開発をしている。 <input type="checkbox"/> 児童生徒のこれまでの学習状況等を踏まえ、教材解釈や教材開発をしている。 <input type="checkbox"/> 生活との関連を意識するなど、児童生徒に興味・関心をもたせるための教材解釈や教材開発をしている。
態度・姿勢	<input type="checkbox"/> 授業に適した服装等を準備している。 <input type="checkbox"/> 明るく前向きに児童生徒に接している。 <input type="checkbox"/> 児童生徒の目を見て話をしている。 <input type="checkbox"/> 時間を守り、規律正しく授業を行っている。
授業の展開	<input type="checkbox"/> 授業の始めに学習のねらいを明確に示している。 <input type="checkbox"/> 学習活動の内容に応じて、効果的な授業形態を選択している。 <input type="checkbox"/> 学習意欲を高めるとともに、児童生徒が思考したり、判断したり、話したり、書いたりする活動を適宜採り入れるなど、主体的な学習を促す工夫をしている。 <input type="checkbox"/> 教材・教具や必要に応じてプリントなどを作成し、効果的に活用している。 <input type="checkbox"/> 授業時間内に学習のまとめを終えることができ、学習の振り返りと達成感、次時の学習の見通しをもたせている。
指導技術	<input type="checkbox"/> 児童生徒が何をすればよいのか分かるよう、的確、簡潔に指示している。 <input type="checkbox"/> 児童生徒の学習意欲を高めたり、様々な考えを引き出したり、思考を深める発問をしている。(導入の発問、展開の発問、終末の発問を使い分けている) <input type="checkbox"/> 声の大きさ、話す速さ、間の取り方、発達段階に即した分かりやすい言葉を使うなど、言葉遣いに十分気を付けている。
学習者への働きかけ	<input type="checkbox"/> 学ぶ姿勢や学習規律について、毅然とした態度で指導している。 <input type="checkbox"/> 児童生徒の発言や行動を共感的に受け止めるとともに、一人ひとりに気を配り、言葉かけをしている。 <input type="checkbox"/> 児童生徒の質問や意見を大切にして授業を進めている。 <input type="checkbox"/> 発問や机間指導、ノート観察などにより学習者の反応や変容をとらえ、授業に生かしている。
板書	<input type="checkbox"/> 学習内容を構造的に表現し、分かりやすく板書している。 <input type="checkbox"/> 児童生徒の発言を板書に生かし、児童生徒の理解を助ける板書している。 <input type="checkbox"/> 漢字の筆順や文字の大きさ、板書のタイミング等が適切であり、丁寧に板書している。



参考資料：授業評価表<P98>